

---

# プリズナー（囚人）

本間有明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プリズナー（囚人）

### 【Nコード】

N3933F

### 【作者名】

本間有明

### 【あらすじ】

近未来、僕らは感情起伏制限法と唱歌禁止法のもとで息の詰まるような生活を強いられていた。ある時、忘れ去られていた「歌」というものに出会った僕たちは……

**(前書き)**

1970年代に書いたものを少しアレンジしてみました。

「BZ」 - アメリカ軍が保持していると言われるドラッグ兵器。  
数トンで世界中を錯乱させる能力を持つ、といわれている。

1970年代に社会問題化し、この兵器の実験台にされた兵士たちは、アト

ミックソルジャーと呼ばれた。

生まれた時代がいけなかったんだろうか？  
それとも生まれてくる国を間違えたのか？

こんな小さな山小屋の中で、死期が迫った今、そんな思いが心の中をよぎっていた。

小屋のまわりをとり囲むように、鬱蒼うつそうと生い茂った灌木かんぼくの間に、手に手に銃を持った兵士たちの姿が、ちらほらと見え隠れしている。夜に入って兵士たちは、その灌木を切り払って焚き火を始めた。あたりには、その煙がもうもうと立ち込めていた。

初めて“歌”というものに出会ったのは、僕がまだ十代の頃だった。

その頃のぼくは、“言葉”と言うものに妙に惹かれて、よく友達とこっそり集まっては、いろんな話を話したり、知っている言葉を教えあったりしていたものだった。

感情起伏制限法当時、言葉が好きだというだけで不良扱いされ、近所の人たちからも、なんとなく白い目で見られるのが普通だった。

俗に言う感情起伏制限法や唱歌取締法がしかれたのは、第三次世界大戦が終わった直後のことだった。

話す事自体は禁止されてはいないのだが、今ではもう街なかではほとんどの人が一言も口をきかない。

話す事が感情の起伏を引き起こすからだ。

人々は屋内にこもってほとんどのコミュニケーションはコンピュータによって行われ、体面した時でさえ、メールの発展型のプラカードと呼ばれる電子画面で意志の疎通そつうをしていた。

おかげで、僕らのような“話すこと”に興味を持つ人間は、犯罪者一步手前の、異常な、墮落だらくした人間として見られてしまうのだった。

友達と言えるものを持っている人も、もう、ほとんどないだろう。

歌を歌うことは、感情の起伏を呼び起こし、勤労意欲を妨げ、生産性の向上を阻害する、として禁止され、歌そのものが忘れさられようとしていた。

泣くこと笑うこと怒ること、その他の感情を表に出す行為は、すべて前近代的な忌むべきこととされていた。

美しい街並み、着飾ったクールな人々。が、そこには言葉もなければ音楽もなかった。

ちよつと前までは、街なかで突然笑い出したり怒ったりして、警察にしょつぴかれる奴も随分といたらしいが、今ではめつたに見かけない。

人々は生得じやうとくの権利を忘れ、なんのために生きているかさえわからずに、ただ自分や誰かの為に、家と仕事場を往復する毎日を強いられていた。

ある時、不良仲間(?)に誘われて、近くの街に住む、Hさんと

呼ばれている、少し年上の人の家に遊びに行った。（当時、この国では、休日に3時間だけ、互いに訪問しあうことが許されていた。）その街には外国の軍事基地があつて、沢山の外国人たちが住んでいたのも、異文化に接する機会が多かつた。

おかげで、僕たちも白い眼で見られることもなく、まるで別天地へきたような気分だつた。

時々、街なかで“立ち話”をしている人を見つけ、僕たちはどきもをぬかれ、その国の、より自由な文化に憧れたりした。

その、Hさんの家で、僕は初めて歌に出会つたのだ。

Hさんは、みんながすこしリラックスするのを見計らつて、なにげなく言葉をしゃべり始め、その言葉に、だんだん抑揚よきようがついて行つて、ついにはそれが歌になつた。

ぼくは、歌のもたらず感情の起伏に驚き戸惑い、強いショックをうけていた。

居合わせた友達のKくんは、自分の理性と感情の起伏の折り合いがつかず、2曲目が終わる頃にはグロッキーになつてうめき始め、Hさんが歌うのをやめて介抱しなければならぬ程だつた。（後にKくんは逮捕され、遺体となつて帰つて来る事になる。）

僕はといえば、その日から後、その街にはあまり近付かなくなつた。

それ以上、歌の世界に深入りするものが怖かつたのだ。

Hさんの家の一件から、しばらくたつたある日のこと、Kくんが訪ねて来た。

Kくんは「さつ最近、う歌の、れ練習をして、い、いるんだ。」  
と言ひ出した。（最初のうち僕らはこんなふうにししか話すことができなかつた。以下略）

僕は、妙にドキドキして落ち着かない気分になつた。

Kくんが別の世界の人のように見えて、なぜか目を見て話す事ができなかった。

その日は、まるで追い払うようにしてKくんを帰してしまっただが、別れ際にKくんの言った言葉が頭を離れなくなってしまった。

「歌を歌う事が、本当にそんなに悪い事なんだろうか？」

感情の起伏を制限して得をするのは、いったい誰なんだろうか？

もし歌うことに、そんなに害がないとしたら、歌を歌うかどうかは、国じゃなくて自分が決めることなんじゃないのかな？」

数日後、ぼくはおそろおそろKくんに歌を習い始めていた。

僕たちは夜中にこっそり集まっては、歌を歌ったり話す練習をしたり、心ゆくまで語りあったりする様になった。

生まれてはじめて、競争や闘い以外の、人との関わりを知ったような気がした。

やがて、言葉に興味を持っている仲間たちが、みんな多かれ少なかれ歌を知っている事がわかって来た。

レコードというものの存在を知ったのもその頃のことだ。

友達の一人が、プレイヤーと言う骨董こつとうものの電気器具を持っていて、そいつを使うと丸いレコード盤にきざまれた歌を聴く事が出来るというわけだ。

ある日、Kくんが東京のどこかにレコードが山のように埋もれている場所があることを聞き込んできて、僕たちはそれを探しに行くことになった。

旧都、東京は瓦礫がれきの山だった。

ある時期から急に、寿命を過ぎた建物や手抜き工事の道路が、次々に壊れはじめ、人々はやむなく、この都会を捨て去ったのだ。

今では、人前で怒ったり泣いたりを繰り返して、刑務所を出たり

入ったりしている生粹きっすいの犯罪者か、自殺志願の子供たちぐらいしか、この街にはやって来ないのだった。

僕たちは、ときおりビルの崩れる不気味な音のする中、ほうぼう探し回ったあげく、とあるビルの地下に放置されたレコードの山を発見した。

ほとんどが割れたり曲がったりして使いものにならない中で、数枚の形を留めた物を持ち帰って、早速、友人の家でこっそり針を下ろしてみたというわけだ。

息づまるような数秒が過ぎて、透き通った女の声がながれ始め、少年たちの声がそれに続いた。

まったく驚いたことに、そのレコードの中では何十人もの人々が、恐れる事もなく歌を歌っていたのだ。

まるで天国のようだ……

法律なんかくそくらえ……とめどなく涙が流れた。

そしてその時、ぼくは確信した。

遠い昔、この国の人たちにも、歌と共に生きた時代があったのだ！  
誰はばかることもなく、歌い、踊り、泣き、笑ったのだ！

僕はこの事実を人々に伝えなければ……

レコードが終わるころには、そんなふうに決心していた。

その日から僕たちは変わった。

隠れてこそこそとレコードを聞いたりするだけでなく、会う人ごと信じのままを伝えてみたのだ。

けれど反応はかんばしくなかった。

ほとんどの人が重く口を閉ざしたまま、まるで気遣いでも見るよくな目つきで、逃げるように去っていった。

この国に住んでいる以上、法律は守らなければいけない。とにかく軍や警察とのトラブルはごめんだ。ちゃんと食べていける。贅沢ぜいぜきは言うな！

- というのが憤つましく暮らしてきた両親の反応だった。

その昔、戦いにやぶれたこの国の大人たちは、爆弾が降って来ない世界、自分や子供たちがお腹をすかせずにすむ世の中を夢見た。彼らは世界一がんばった。世界中が目を見はった。

誰ひとり責めるわけにはいかない。歌なんか歌っていたら子供一人育てられない時代だったのだ。あたりまえの話だった。

僕たちの小さな力では、現実少しもゆるがないように思えた。なにしろ敵は結局のところ、僕や君、人々の心の中にいるのだから

ら

そうこうしているうちに、Kくんが捕まった。

僕たちは、いつのまにか当局に眼を付けられていたのだ。

前にも書いたとおり、裁判も開かれぬまま、Kくんは遺体となつて帰ってきた。

- 逃亡を謀はかった結果の事で、いたしかたなかった。-

と言つのが当局の言い分だったが、後にテロリストになつたHさんによると、Kくんは警察のリンチによつて殺されたのだった。

Kくんは、死の間際まで歌を歌い続けていたと言う。

やがて僕にも逮捕され投獄される身となる時がやってきた。

捕らえられて幾日目か、拘置所こじしよから刑務所へ移送される途中での出来事だ。

その灰色の大きな車には、おかしな事に、僕と年若い警察官と運

転手の三人しか乗っていないかった。

夕暮れ迫る郊外の、人っ子一人いない山道に差し掛かったとき、突然車が停車したのだ。

僕は、Kくんの末路を思い出して血の気が引いてゆくのがわかった。

すると、その若い警官は意を決したようにドアを開いて一言「にっ逃げなさい！」と言ったのだ。

即座に僕は理解した。

「逃がしておいて殺すつもりなのだ。体は石のように硬直したままだった。」

警官は僕の眼を覗き込むように言った。

「私のおじいさんは、よく歌を歌ってくれました。」

まだ、なにがなんだか分からずに居る僕に、警官は

「警察内の唱歌解禁派で、Hさんの友人です。早く！早く逃げなさい！」

次の瞬間、僕は脱兎だつとのごとく、なつかしい母なる自然の大気の中へと駆け出していた。

その後、僕は廃都・東京のHさんのアジト（かくれが）を皮切りに、歌を愛する人たちの手引きで各地を転々とし、最後にこの山小屋にたどり着いたのだ。

けれど、ここも官憲の知るところとなった。

すでに、手に手に銃を持った兵士たちが、小屋の周りを取り囲んでいる。

彼らは、こちらが俺一人だということも把握していないらしく、そのおおげさな装備と大規模な捕獲作戦に、ただただあきれ、最後には笑うしかなかった。

夜に入って兵士たちは、あたりの木を切り払って焚き火を始めた。炎と投光機によって小屋の周りは真昼のように明るかった。

「ただちに銃を捨てて出てきなさい！」  
さつきから幾度となく拡声器の合成ボイスが叫んでいる。  
「六十秒後に一斉射撃を開始し、突入を敢行する！」  
ついに最後の通達が下った。

今では俺も、いつのまにかテロリストたちのヒーローに祀り上げられていた。

降伏しても、たぶんKくんのように袋叩きにあって殺されるだろう。

それなら、いつそ今ここで殺されよう。もう逃げ回るのにも疲れ果てた。

だが降伏なんかするものか。悪いことなんかしちゃいねー。  
最後まで誇り高く生きよう。

やっと決心が着いた。

すると、不思議なことに、心の奥底から自然に歌がわいて出て来た。

最初はつぶやくように・・・しまいには銃撃の恐怖を振り払うように力のかぎり歌った。

鉄格子の中で夢にまで見るものは

覚えているだろう？そうさ

子供の頃のこと 陽だまりの小さな時間

なにひとつ 誰ひとり

君を縛れやしない

答えておくれよ

自由の空は見えるかい？

心のどこかで

いつもプリズナー

歌い終わっても俺はまだ生きていた。

あたりはしんと静まりかえっている。  
おそろおそろドアを開けてみると、兵士たちは銃口を下ろして立ち尽くしていた。

その時は知るよしもなかったが、数時間前に、1トンを数億人を錯乱させると言われるドラッグ兵器

「BZ」が、世界中いたるところで爆発したのだった。

ときは晩秋、あたりには兵士たちの焚<sup>た</sup>いた、麻の灌木の煙が、もうもうと立ち込めていたっけ。

俺の頭の中でも、何かが、すこしずつ狂いはじめていた……

(完)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3933f/>

---

プリズナー（囚人）

2010年10月10日02時08分発行